

- Die Wiener Secession, H. Bohlaus Nachf, 1986
- ・ Donald Daviau, *Der Mann Von Übermorgen*, Österreichischer Bundesberlag, Wien, 1984
 - ・ Robert Waissenberger, *Die Wiener Secession, Jugend&Volk*, Wien, 1971
 - ・ Ilona Sarmany-Pasons, *Der Einfluss der französischen Postimpressionisten in Win und Budapest*, Mitteilungen der Österreichischen Galerie, Nr. 78-79
 - ・ “Secessionismus und Abstraktion”, Österreichische Kunst 1900-1930, Galerie Metropol (展覧会カタログ)

・「スーラと新印象派」2002年 (展覧会カタログ)

◎資料所蔵機関

京都工業繊維大学 (図書館), 京都国立近代美術館, 愛知県アートライブラリー, 豊田市美術館, お茶の水女子大学 (図書館), 国立西洋美術館図書館, 東京国立近代美術館ライブラリー

「生きられる空間」の複相性をめぐって

——文学テキストに見る出来事の表象と記憶の問題

上野 ふき・鶴田 涼子

ドイツ文学専門 後期課程1年

1. はじめに

平成18年度奄美・沖永良部研究合宿は、科研費プロジェクト「言語表象と脳機能から見た環境生成のメカニズム——生きられる空間の複相性をめぐって」の四本柱のうち、「言語記号システムの先端的な分節-表象の場である文学テキストにおいて、出来事の表象と記憶の問題がどのように探求されてきたのか」、「日本の社会・自然システムの周縁部である離島地域において、現代的なシステムのグローバル化によって、伝統的な身体、社会、自然の分節-表象のされかたがどのように変容したのか」という2つのテーマに基づいて企画された。報告者上野は、これまで前期課程において、テキスト内における鉱山、鉱物に象徴された地下世界を通して、ドイツ・ロマン派の詩人ノヴァーリスの世界観、宇宙観を考察してきた。しかし修士論文を書く際に改めて、ノヴァーリスにおける詩的世界と自然科学的環境が相互に作用するという問題が浮かび上がった。今後そのテーマを深めるにあたって、奄美・沖永良部研究合宿がいかにより有益な体験となったか、それを以下に示したいと思う。また、報告者鶴田は民間伝承に関心を持っており、修士論文ではグリム童話における涙の役割について考察してきた。グリム童話では、主人公の救済につながるものとして自然崇拝と登場人物の涙を流す行為があげられる。しかし修士論文執筆の際、実際に童話が編まれた19世紀の人々の心性や時代背景の観点が不足しており、今回の研究合宿では、人々の心性を作り出す根底にある人々の生きた

環境が、民話の中で如何に語られうるか、その実態の一例を聞き取ることが出来た。

2. ノヴァーリス及びドイツ・ロマン派における自然科学的環境と文学の関わり

現在報告者(上野)は、文学テキストに描かれた自然科学的側面と内面空間が、現実世界における自然科学と空間とどのように係わり合い、互いに作用しあっているかということを中心として研究を進めている。その際手がかりとするのは、詩人ノヴァーリスを中心としたドイツ・ロマン派のテキストである。ノヴァーリスは法学、哲学、文学、歴史といった人文科学研究だけでなく、数学、物理、化学、地質学、鉱物学などの自然科学研究にも親しみ、これらあらゆる分野の知識を融合させた詩・小説を理想型として作品を残した。特に地質学、鉱物学にいたっては、彼が就いていた職にも関連していたこともあり、その造詣の深さは、彼の師 A. G. ヴェルナーに劣らない。日々の生活と密着した自然観察や、学問的な探求心から生まれた彼の作品には、美しい鉱山が描写されており、それは内面と宇宙空間を同一視した *unio mystica* という世界観・宇宙観を表象している。また、地下を探求する姿勢は錬金術における賢者の石をはじめとして、神秘主義やアニミズムといった非キリスト教的宗教観につながる。

日本の最南端にある沖永良部島の地形は非常に複雑であり、北部は比較的なだらかな地形が広がるが、中部以南は緑豊かな山が連なっている。中でも沖永良部

は、隆起性サンゴ礁から成る島で、全島のほとんどがサンゴを起源とする石灰岩で出来ており、島の西部にある最高地点の大山（標高246m）の周辺は、ドリーネが発達したカルスト地形となっている。地下には多数の鍾乳洞が発達しており、豊かな海と豊かな山をそれぞれの地下において水路がつないでいる。今回現地調査を行なったのは、島の生命を支える水場と島の中で最大規模を誇る昇竜洞である。水は石灰岩を通して、水場へと流れてくるため多くのカルシウムを含んだ栄養価の高い飲料となっている。それは飲まれることによって身体の骨と変化する。そしてその骨はやがて石灰岩の山の中に葬られる。人間の骨は自然の骨に返されるのである。ここには生命の循環を表すアニミズム的宗教観が現れている。また、ドイツにおいてはユング以降、鍾乳洞の世界は、集合の無意識が抱える形象の貯蔵庫として表象されてきた。このような内陸的ドイツ的な表象とは違って、陸地と海との狭間にある沖永良部の鍾乳洞は、日常と非日常との狭間、意識と無意識との中間地帯として独自の表象世界を産み出している。

奄美大島を生涯の地として選んだ作家島尾敏雄は、独自の「ヤポネシア」文化論を展開した。彼の作品の多くには、文学的表象とアニミズム的表象と、また沖縄文化やキリスト教文化、琉球王朝の支配下に置かれる以前の奄美固有の文化といった、複数の文化の融合が見られ、沖永良部を舞台として描かれた干刈あがたの文学作品にもアニミズム的表象世界が現れている。こうした世界はノヴァーリスの世界表象と多くの点でつながるものである。ノヴァーリスの作品の中で、無機物であるはずの石に魂を認め、鉱山を1つの生命体として考える思考は、死した人間の骨を珊瑚の洞窟におさめ、魂を自然へ返すという、伝統的埋葬を守る奄美群島の世界観と共通する。ノヴァーリスが比喩的に物語という形式で無機物と有機物を合一させた姿が、奄美では実体化していると感じられた。ドイツ的・山岳的な地下表象とアジア的・群島の地下表象が結びつくことによって、東西の隔たりを越えた環境、宗教を、文学テキストを通して考察し得る可能性が見られた。今後研究を続けていく上で、テキストのみに固執するのではなく、このようなテキストから環境を、環境からテキストを読むという観点を生かしていきたい。

3. グリム兄弟の収集した民間伝承の生成と変容過程と伝えられる唄の地域性の関わり

報告者（鶴田）は現在、「グリム兄弟の蒐集した民間伝承の生成と変容過程」を研究テーマとしている。作者を持たない民間伝承には、その土地の地形や風土、習慣などが色濃く出ている。ひとつひとつの伝承は、その伝承が生まれた土地の「かつて生きられた空間」を証言し、さらには、それを語り継ぐ人々の「生きる空間」を映している。民話を語り伝える人々には、彼らが生きている空間における自然表象がおのずと絡んでくるためである。そのため、報告者は口承文芸における自然表象という観点から、民話を研究しようと考えている。民話を収集したグリム兄弟の態度には、無意識的に表象されるもの、外的に見えないという理由で忘れ去られようとしているものを大切に保存しようとする信念が貫かれている。人間が抱きうるさまざまな表象は、20世紀になってユングによって集合的無意識という名で捉えられてきた。それは「生きられる空間」からの恵みであり、民間伝承を研究する際には、その話の生成過程における表象と伝承過程における表象の問題を忘れることは出来ない。今回報告者は、このように表象のメカニズムを追って、人間の精神活動の根本を理解しようとし、そこからグリム兄弟が集めた民間伝承をあらたに捉え直すことを試みた。

聞き取り調査を行った奄美諸島は、琉球王朝の文化と本土の文化との狭間にあり、「クレオール主義」という多民族的・多文化的な概念を打ち出した今福龍太氏は、近年、群島論を展開する中で奄美諸島を活動の拠点のひとつとしている。日本では、奄美諸島における独自の文化を表すものとして、近年シマウタへの関心が高まっている。集落（シマ）ごとに唄われるシマウタは、島の人々の「生きられる空間」を体現している。今福龍太氏を導き手として迎えた沖永良部島での現地調査では、三汁（さんしる）と呼ばれる楽器演奏や島唄を聴く機会を得たことによって、同じ奄美文化圏の中でも島毎に文化的色彩が違い、1つの島の中でも、さらに小さな集落毎に伝統芸能が違うことを検証することが出来た。沖永良部島で唄い伝えられてきたウタが持つ精神は、グリム童話のもつ信念とかけ離れてはいない。なぜならグリム童話は、まだひとつの国として成り立っておらず、300余りの国に分かれていた19世紀初頭のドイツに編まれたからである。方言や土地特有の表現が見られるものもある。グリム兄弟

の収集した民話にはゲルマン的、ケルト的、キリスト教的、さらにはアラブ的な要素がさまざまに入り交じっており、それらを研究することは、そもそも文学研究の枠内では収まりきらない、脱領域的な視野を必要とする。

沖永良部では、記念碑や跡地を巡ったが、中でも水場が神聖な場であり、泉の周囲に人々が集まって集落を形成している。人々の生活空間と自然環境を知るためのこれらの経験は、生きる糧のひとつとしての水に対する思い入れを知ることになり、口承文芸が持つ自然崇拜の表現の多様性を読み解くひとつの鍵となった。また、テキストを「読む」という行為と、口承によって「聞く」という行為から生み出される表象の乖離を目の当たりにした。こうした想像と現実の乖離は実際に現地に赴かなければ体験できないことである。そのため、民話が生まれた14世紀の地域性や習慣が今どのように息づいているかを知るためには、実際に話が生まれた土地に赴き、現地の方から話を聞き、当時の様子との違いを確認する必要性を再認識している。

4. おわりに

上野は、今後、「ノヴァーリス及びドイツ・ロマン派における自然科学的環境と文学の関わり」というテーマで実地調査を通じ、神秘的な視点ではなく自然科学的な観点からノヴァーリスの一面を解釈していく予定である。ノヴァーリスが数学と詩を融合させようとした過程と成果について考察する中で、本来的な意

味における文理融合型の研究を目指すものであるが、自然科学的な学問の発展とロマン派的な想像力の飛翔を可能にした鉱山というもののあり方を多角的に検証するために、現地調査は不可欠なものとしてある。鶴田は、博士論文では、「森と水」というテーマに即していくつかの民話を取り上げ、物語の舞台となった時代背景と、これら民話がグリム兄弟によって書き言葉にまとめられた当時の時代背景を検証し、それが受容されていく中でどのような変化を被ったかを明らかにしたいと考えている。今後、民話が生まれた地と環境の変化、またそれに伴う人々の心性の変化の視点から民話研究を進めるにあたり、ドイツの「シュヴァルツヴァルト野外博物館」を訪ね、森や泉に対する人々の捉え方の変化についての聞き取り調査と、それをめぐる言説の記録を行う計画である。文学作品には、その物語を生み出す感情とそれを生成するための環境がある。それは自然、つまり木、水、石、海、空など、人を取りまく環境が作者の五感によって感知され、思い出され、また表出されるものである。奄美での実地調査を終え、文学テキストと改めて向かい合った今、博士論文の執筆のためには、テキストが生まれた経緯や、テキストが書かれた時代状況、書いた人を取りまく環境を現地に赴くことで追究することが必要であるという認識に至った。テキスト分析と現地での実地調査が重なり合ったところに、文学研究の真髄をみることが出来ることを強く感じている。

日本における『アフリカン・ダンス』の広がり

——東海地区のダンス・クラスを事例に

菅野 淑

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 前期課程2年

筆者は、セネガルの首都ダカールにおける現代芸術(舞踊)に関する研究を主眼としている。対象としている舞踊は、日常的に人々の間で踊られているものではなく、舞台上でプロの人々が踊り、披露するものである。彼らはそれを、「バレエ・スタイル」の「アフリカン・ダンス」¹⁾と呼んでいる。そしてその「アフリカン・ダンス」は、セネガル人ないしその他のアフリカ人ミュージシャンを通じ、または習得しに現地へ行った日本人を通じて、日本へ紹介されている。

将来的に、現地(セネガル・ダカール)で調査することを踏まえ、現在は、日本における「アフリカン・ダンス」クラスに通う人々を対象に調査を行っている。なぜなら、日本でのクラスと、セネガルでのバレエ・カンパニーは密接に関わりがあるからである。

「アフリカン・ダンス」、「アフリカン・ドラム」²⁾が日本に広がり始めたのは、1980年代後半辺りからである。その頃から日本国内で、西アフリカの音楽家の公演が開かれたり、日本人によるセミナーやワークシ